

友だちどうし

小川未明

青空文庫

乳色ちちいろの冬の空ふゆ そらから、まぶしいほど、日の光ひ ひかりは大地だいちへ流ながれていました。風かぜのない静しずかな
 日ひで雪ゆきのない国くにには、やがて、春はるが間近まぢかへやつてくるように感かんぜられるのでありました。
 年としちゃんしやうは、紅茶こうちやの空きあかんの中なかへ、ガラスのおはじきを入いれていましたし、正しやうちゃんちやうは、ほうじ茶ちやの紙かみの空きあぶくろの中なかへ、ガラスのおはじきを入いれていました。また、秋あきの暮くれ
 にお宮みやの大きおおな木きの下したで拾ひろつた、銀杏ぎんなんの実みも入いれていました。
 毎朝まいあさ、洗あらい清きよめられる玄關げんかんの外そとのアスファルトうえの上に、二人ふたりはしやがみながら、た
 がいにおはじきを出だして見みせ合あつたり、取とりつこをしたりして、遊あそんでいました。年としちゃんちやう
 んの持もっている、青あおい色いろのおはじきは、町まちへお母かあさんといっしょにお使つかいにいつて買かつて
 もらつたもので、眼鏡めがねのようようにして、すかして見みると、空そらも、家いえも、木きも、うす青あおく、遠とお
 く、遠とおく、なつて見みえるので、年としちゃんしやうは魔法まほうの眼鏡めがねと自分じぶんで呼よんでいる、大だい事じな、そし
 て、好すきなおはじきでありました。また、正しやうちゃんちやうの銀杏ぎんなんの実みは、自分じぶんが木きから落おちた
 のを拾ひろつて、いいのだけを扱えらんだもので、たとえおはじきを五ご個こでも、一ひと粒つぶの銀杏ぎんなんの
 実みとは換かえがたい貴とうといものでありました。二人ふたりは楽たのしそうに、自分じぶんのものを出だしたり、入い
 れたりして、自慢じまんしあつて、仲なかよく笑わらつていたのです。

そこへ、見知らぬ、一人の少年がやってきました。

「なにしているの？」と、さもなつかしように、少年は、いい寄りました。

「おはじきをしているのだよ。」と、年ちゃんが、少年を見ました。

「僕も、仲間に入れてくれない？」と、少年は、頭を傾けて、二人の顔を見たのであります。

いかにもその少年は、弱々しそうであり、さびしそうでもありましたから、「ああ、お入りよ。」と、正ちゃんがいいました。

少年は、喜んで、二人と並んで、アスファルトの上へしゃがみました。

このとき、年ちゃんが、「君の家は、どこだい？」と、少年に、ききました。

なぜか、少年は、恥ずかしそうにして、だまっていました。

「町の方？」と、正ちゃんが、いいました。少年は、だまって、ただうなずきました。

「僕に、おはじき三個ばかり、貸してくれない？」と、少年は、正ちゃんの顔を見ました。

「君、おはじき持っていないのかい。」と、正ちゃんは、少年にいつて、年ちゃんと相談するように顔を見合わせました。

「どうしたら、いいだろう？」と、心に思つたからです。断るのも、なんだか意地悪に感ぜられるし、また、これまで話したこともない、少年が、おはじきを持たずに、仲間へ入れてくれというのも、ずるいような、まちがつているような、気がしたからです。しかし、おはじきの上手な年ちゃん、自信を持つていました。

「いいから、貸しておやりよ。正ちゃんが二個、僕が二個、貸してやろうよ。」と、年ちゃんが、いいました。

「貸してくれる？　ありがとう。」と、弱々しい、青い顔の少年は、急に目を輝かして、お礼をいいました。

「だが、君が、負ければ、もう貸してやらないから。」と、年ちゃんが、念を押しました。

「いいよ、僕が、負ければ、もう貸してくれるといわない。そして、今度きたときに借りたのは返すからね。」と、少年は、答えたのです。

「いいから、しようよ！」と、正ちゃんは、元気でありました。

三人は、輪になつて、おはじきをはじめました。しかし、その少年は、恐ろしく感じたほど、おはじきがうまくつたのです。年ちゃんと正ちゃんが、いくら戦つてもさんざんに負かされてしまいました。最後に年ちゃんの大事にしておいた、青いおはじきも、ま

た、正ちゃんしょうちゃんの持つていた銀杏ぎんなんの実も、すっかり少年しょうねんに取られてしまつて、少年しょうねんは、ただ借りた四個こだけをアスファルトの上へ残うえして、あとのさらつた分ぶんをポケットに入れると、

「さようなら。」といつて、さつさといつてしまいました。

年としちやんと、正ちゃんしょうちゃんの二人ふたりは、ものもいえずに、泣き出しそうな顔かおつきをして、少年しょうねんの後ろ姿うしすがたをうらめしそうに、見送みおくつているばかりでありました。

* * * *

少年しょうねんの姿すがたが、見えなくなつた時分じぶん、あちから英ちゃんえいちゃんが、ボールを空へ投ほうり上げながらきました。そして、年としちやんと正ちゃんしょうちゃんが、元氣げんきなく、ぼんやりとしているのを見みて、

「どうしたの？」と、英ちゃんえいちゃんは、きました。二人ふたりは、少年しょうねんの話はなしをしました。すると、

「どっちへいつた？ 卑怯ひきようのやつだ！ 僕ぼくが、取り返かえしてきてあげるよ。」といつて、英ちゃんえいちゃんは、駆け出だしました。

町まちの方ほうへつづく道みちには、人影ひとかげが、ちらほらと見え、チンドン屋やの音おとなどがして、にぎ

やかそうでした。

「英^{えい}ちゃん^は、強^{つよ}いから、けんかをしたって、負^まけはしないね。」と、正^{しょう}ちゃん^が、心^{しんぱ}配^いしながら、いいました。

「僕^{ぼく}だって、あんな奴^{やつ}、やつつけられるんだよ。」と、年^{とし}ちゃん^はいって、なぜもつと早^{はや}く、この勇^{ゆう}気^きが^で出^でなかつたものかと後^{こう}悔^{かい}しました。

二人^{ふたり}は、英^{えい}ちゃん^の後^{あと}を追^おって、町^{まち}の方^{ほう}へ駆^かけ出^だしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

初出：「児童文学」

1937（昭和12）年1月

※表題は底本では、「友《とも》だちどうし」となっています。

※初出時の表題は「友達同志」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

友だちどうし

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>